

## 名所図会の視点について

Robert GOREE

私は近世中期から後期に人気だった名所案内記の一種である名所図会を学際的な立場から研究しております。とくに博士論文においては、名所図会はなんのために出版されたのか、どんな原則によって編纂されたのか、また、どうしてベストセラーになったのか等々を考慮し、名所図会そのものの歴史を物語るような研究を目指します。私は、名所図会が、挿絵と文章で描写された名所を通じて読み手に都市や風景などの環境を現実として体験させる役割を果たすという仮説に基づいて、名所図会とは、旅行のための実用的なガイドブックというより、空間認識にあふれ、かつ娯楽性をもった教育的な本だと考えたほうが適切ではないかと考えています。考えの根拠として、多くの名所図会の凡例や序文で言及される「臥遊」という言葉を研究のキーワードとします。

今回の発表では、秋里籬島編集、1780年出版、『都名所図会』と1787年出版、『拾遺都名所図会』を取り上げ、読者を臥遊させることを目的だとすれば、籬島がどのような視点を読者に与えたのか、つまり臥遊的な読み方をさせるためにどのような手法を使ったのかを検討したいと思います。

名所図会の挿絵を見ると、鳥が見おろすように、高いところから広い範囲に名所の全体を大きく眺め渡し、お寺、神社、山、川、盛り場などの場所を細かく味わうことができます。しかも、水瓜を食べる農家、凧を揚げる少年、箒で掃くお坊さんたち、旅行する女性のような場面も見られ、世界は人物であふれている印象を与えています。鳥瞰図の中のさまざまな人たちは、現実的な名所をそのままに表現しているだけでなく、挿絵の視点構造を支える働きもあります。籬島は『都名所図会』の凡例においてこのように指摘しています<sup>①</sup>。

かるがゆえに図ごとに人物あり。形容いたつて微少なる人物はその地廣大  
としるべし。形容微少ならざるは境地狭少なり。

つまり、人物の大きさによって場所の規模が理解できるように、人の姿を幾何学的に表現しているのです。例えば、ご覧のように『都名所図会』の竹原春朝齋が描いた「御霊神社」の挿絵には、数人の小さな幾何学的人物がいます。こうすることで、読者に本堂や鳥居や木の大きさが分かりやすくなります〔図1〕。これに対して、『都名所図会』の「夕顔塚」という挿絵では、描かれた人物が大きいため名所自体が割と狭いと読者は当然のように想像するでしょう〔図2〕。

次に、挿絵に描かれた人の姿は、そのものみならず、仕草も読者の視点を構成する大きな要素であると指摘したいと思います。名所図会の挿絵をよく見ると、指差している人物が目につきます。その上、名所図会の挿絵は殆ど全て



図1 『都名所図会』「御霊神社」(イエール大学東アジア図書館蔵)

の挿絵に指を差している人物が見られます。英語には、「指差す」という意味を持つ“deixis”という単語があります。これはギリシャ語起源の心理学や言語学の専門用語であり、この分野では、人々は、何の理由で、対象を指で直示するのかという課題がしばしば扱われます。今回は、“deixis”の概念について論じる時間はありませんが、これを名所図会の視点の要素として考えて行きたいと思います。挿絵の指差している人物は、考えれば考えるほど、挿絵の中でその象徴的な意味や機能は意義を持ち、編纂者と画家が意識的に構図を考えたと判断できると思います。

いうまでもないかもしれませんが、指差している人物は、挿絵の要素を強調



図2 『都名所図会』「夕顔塚」(イエール大学東アジア図書館蔵)



図3 『都名所図会』「北白河の石仏」(イエール大学東アジア図書館蔵)

する働きがあります。『拾遺都名所図会』の「北白河の石仏」という挿絵では、ご覧のように、右側の手で笠を持つ男性と左側の笠を冠っていない男性は、やはり、両人が石仏のほうに指差して、名所の主要部分へ読み手を誘い、「これはすごい。ご覧なさい。」ということを表現しています [図3]。周りに描かれている観光客が何かを発見した様も旅の楽しさを伝えています。これと同じようにお寺の本堂や店の名物といった、挿絵の中の“名所”をはっきりと指差している挿絵はほかにもあります。

ところが、実は、このような例は少なく、『都名所図会』ばかりでなく、名所図会の殆どは、名所の中心ではなく、比較的に重要でない要素や無関係な所を指差しています。例えば、『都名所図会』の「鏡石」という項目を見てみますと、キャプションに「物の影よくうつりてあきらかなる怪石なり」[図4]。これを、石の前に立つ女性は楽しんでいますが、右下の女性は鏡石ではなく、右のほう



図4 『都名所図会』「鏡石」（イェール大学東アジア図書館蔵）

を指差しています。しかも、よく見ると、鏡石に自分を見る女性も同じ方面を指差しています。二人の女性は、なにを指摘しているのかははっきりしないので、推測するしかありません。右側の女性は手に山菜らしき植物を持って「摘みに行こうよ」という気持ちを表わしているのかもしれませんが。指差している人物は、具体的にないを示すのか確認出来なくても、名所の中心を見ると同時に、無関係の事柄が、読者を挿絵の外へ向けさせる働きがあるでしょう。

同じように、『都名所図会』の「北白川」の挿絵でも、ご覧のように、左側の滝下集まる旅人は川そのものを見て観賞していますが、右側の山道を歩く旅人は、キャプションの「石切の業」<sup>いしきり すぎわい</sup>のことを強調するために石切る人物を指差

しています [図5]。ですから、この名所は中心は一つではありません。それから、『都名所図会』の「嶋原」という挿絵をご覧ください。同じように、嶋原の中の茶屋や芸者のみならず、出口に出る駕籠を大げさに指差している人物がいます [図6]。挿絵の内容は、挿絵に付けられた「けいせいの賢なるはこの柳かな」という其角の発句に関係がありますが、なぜ駕籠を指差しているのか、という謎がでできます。次は、『拾遺都名所図会』の「祇園会鐘の児」ということを描写する挿絵はご覧のように、駕籠の祭りの盛り上がっている様子が中心です [図7]。それなのに、行列の一番先の男性は、橋下の川魚を指差しています。もう一つの例を挙げます。『拾遺都名所図会』の「壬生隼社」という挿絵をご覧ください [図8]。左側のつるべを履き川の中で水菜を持つ農夫は、右側の旅人二人に声をかけている様子ですが、右上の神社を指差しているともみえるし、自分の頭を指差しているともみえます、はっきりしません。

指差しされている、駕籠、川魚、農夫という例は、滑稽的なニュアンスを確かに含んでいます。しかし、次のような解釈ができるのではないのでしょうか。私は、これらの指差している人物の働きは、やはり、名所の内容をただ示しているだけでなく、名所の空間を感じるように、全体を見るように誘い、すなわち旅をしているように誘っているのではないかと提案します。つまり、名所図会の作者は、読者が、描かれた名所を楽しむ時は、彼らが適当に気に入るところを見るべきで、特定の重要な箇所視線を集中しなくてよいと考え、挿絵の中の名所の空間そのものをすべて楽しめるように、いろいろな方向に目を誘っているのです。要するに、さきほど申し上げた“deixis”の動きを示す人物は、名所を一つの角度から観ることのみならず、さまざまな視点から読み取れる空間だと、読み手にアピールする要素だと思います。その上、指差している人物は、幅広い社会的な立場の人たちです。女性も男性も、子供も老人も、商人も武士も農民も、いろいろな年齢、性別、身分の人々が指差しているので、空間的だけではなく、社会的にも流動的な視点をもつということが出来ます。つまり名所とは、それぞれの人にとって多くの重要な意味を持つ場所として描



図5 『都名所図会』「北白川の石切の業」(イエール大学東アジア図書館蔵)



図6 『都名所図会』「鳴原」(イエール大学東アジア図書館蔵)



図7 『拾遺都名所図会』「祇園会鉾の児」(イエール大学東アジア図書館蔵)



図8 『拾遺都名所図会』「壬生集社」(イエール大学東アジア図書館蔵)



かれています。このことから、『都名所図会』の名所は厳格に描写されている固定的な空間ではなく、流れるような視点からアクセスできるダイナミックな世界だと言ってもいいでしょう。

さらに、挿絵を流れるように見る為の視点構造を、水平線と垂直線だけでなく、奥行きも考慮して分類できると思います。三つの空間構造が窺えます。これは『近江名所図会』からの例です<sup>②</sup>。一番目は、遠距離が目立つように描かれた挿絵です。二番目は、中距離が目立つように組み立てられた挿絵があります。そして、三番目は、近距離がはっきり見えるように描かれた挿絵があります。この三つの構造は原則的に名所図会中に均等に分布しているので、読者はページをめくるにつれ、視野がリズム的に開けたり、閉じたりします。このような構図を持つ挿絵とさまざまな人物の仕草があいまって、流れるような視点を生み、読者各自の風景が生まれるのです。

では、なぜこの流れるような視点が必要なのでしょう。それは最初に申し上げた「臥遊」を容易にさせる戦略だと思います。漢字の通り「臥遊」というのは、居ながらにして、遠い場所にて自らを遊ばせ、名所鑑賞をする方法といえます。名所図会の読み方の基本的な概念の一つだと思います。『拾遺都名所図会』の序文に、藤原隆建はこのように説明しています。

『名所図会拾遺』は、やましろう とゆう やまかわ み しん し ふつろう しょう ごうまつ  
山城州の都邑、山川の実、神祠・仏楼の勝、毫末を  
たんかん わ せんり すにん こ きょぜん はっぽう わきま  
短簡に分ち、千里を守陰に籠め、いはゆるよく居然として八方を弁ふる  
ものならんや。それだにじょうじつ情実の勝るありてせいしょう ぐ濟勝の具なき者、ただまさに  
臥してもつてこれに遊ぶべし。

つまり、『拾遺都名所図会』というのは、(今の京都府の南部である)山城国の繁華なまち、山と川の美しさ、神社寺院のすぐれてよい景色を細かく簡単に分配し、非常に遠い距離を瞬間的に含ませて表わし、いわゆる読者は動かず座りながらにして、多方面を十分に知るものではないだろうか。それだけで、あり

のままの事情がすぐれて、景勝の地をめぐることができない人々は、ただ、本当にからだを横たえてこの景勝に行くだろうというような序文です。

読み手に、名所のありのままの事情を伝えるのが目的であれば、地理空間のリアリティを描写しなければならないでしょう。指差している人物も、リアリティを説得する機能の一つであると思います。「本当にからだを横たえてこの景勝に行く」という体験を促進するためには、一つの固定的な視点ではなく、いろいろな立場や見方をすることが挿絵の世界に入り込むのに役立ちます。例えば、実際に鏡石という名所に遊びに行く時には、石にうつっている自分のすがたをじっと見つめるはずですが、現地ではその他の事物にも意識的にも、無意識的にも、注目するのが自然でしょう。戸外にいる時は目が広範囲に動く傾向にあります、しかも、自分が移動すればするほど、自分の視点は少しずつ変わります。

もちろん、名所図会の挿絵は枠内の二次元的な図画なので、現実より深みが欠けています。しかし、臥遊という体験をさせるためには、深みがあるような三次元的な風景を拵え、人間らしい視点が必要ではないでしょうか。描写されている名所などを固定しないように、指差している人物は読み手の目を動かしています。見る範囲を制限すれば、読み手は自分の動いていない現在地から逃避しにくくなるでしょう。

小川裕充氏は、「臥遊」というのは「中国山水画の創造を永く支え続けてきた、最も基本的かつ本質的な概念の一つである」とされています<sup>③</sup>。小川氏は、「臥遊とは、本来、画家自身が過去に訪れたことのある場所を自ら画いてそれを眺め、坐ったり臥したりしたまま、居ながらにして再訪、三訪し遊ぶことを言う」と説明され、代表的な例として、1170年の「瀟湘臥遊図」(*Xiao Xiang woyou tu*)という南宋時代の作品があります。これは、画家が自分自身を想像上で自由に旅できるように描いた風景です。

臥遊という概念はいつ日本に伝えられたのか、どういうふうに使われたのかということが、これからの研究課題です。南宋時代の中国は近世日本と比べ

ると臥遊のニュアンスは違いますが、基本的な概念の意味が似ていると解釈できると思います。つまり、遠い場所にてヴァーチャルトラベルできる方法です。

最後に、名所図会の本文は、挿絵の臥遊的な視点との関係について、簡単に取り上げたいと思います。臥遊を行う為に、挿絵で指差している人物は、流れるような視点を支える働きがあるとすれば、本文の記事とどんな関係があるでしょうか。文章にも、流れるような臥遊的な視点があるでしょうか。挿絵の指差している人物と本文の関係は、特にパターンはないと思います。時々、挿絵で指差されている名所や場所が本文の記事で集中的に説明されている場合がありますが、そうではない場合が多いです。

しかし、読み手に与える印象や効果としては、文章でも挿絵の指差している人物のような戦略があると言えます。名所図会の文章記事は、一般的に最初の部分がある名所を主に紹介して、そのあとは、縁起、和歌、物語、軍記もの、記録などのような文献から引用しています。原則として、いろいろなジャンルや時代が違う文章の引用を集めて、文書でいろいろな面から名所について言及しています。

要するに、挿絵の中の指差す人物はある名所にたいして流動的な視点を読者に与え、いっぽう、文章の引用は、文学的、歴史的な視点からある名所の由来や伝説などを指摘して、読者の興味をうながします。また、記事の中には歌枕のような名所に親密な関係をもつ文献のみならず、籬島が詠んだ狂歌のような比較的重要な引用もあります。挿絵のあちこちにそれぞれの読者の目を導くように、文章記事は様々な異なったジャンルや重要性の文学的な見方をしているので、名所の歴史や雰囲気についてさまざまな想像を働かせます。つまり、籬島は文学作家などの文章を使って、名所の時間的な流れなどを示しているのです。

[注]

- ①秋里籬島著『都名所図会』及び『拾遺都名所図会』（『日本名所風俗図会』巻8、朝倉治彦編、角川書店、1981年）
- ②秋里籬島著『近江名所図会』、『日本名所風俗図会』巻11、朝倉治彦編、角川書店（1981年）
- ③小川裕充著『臥遊—中国山水画—その世界』中央公論美術出版（2008年）

**\* 討議要旨**

村尾誠一氏は、①名所図会のなかで名所とは無関係のものを指差す人物が描かれることで、視点が名所の周辺に流れるとの見解を示していたが、それはどのような意味をもっているのか、②名所図会と山水画を「臥遊」という点から比較していたが、量産される図会と一点物の画を同等に捉えて問題はないのか、と訊ねた。それに対して発表者は、①見る者の視点をあえて一箇所限定しないことで、周辺の様々なものにも自由に目を向けるよう促している、②指摘のとおり山水画との比較はより慎重に検討すべきだ、今後の課題にしたい、と答えた。

武井協三氏は、名所図会とは旅行する前に見て楽しむものか、旅行後に楽しむものなのか、と質問し、発表者は、たとえば『西遊記』には、旅行後に日記をつけるため名所図会を参照する様子が描かれている。しかし、旅行前に気分を盛り上げるために読むこともあったかもしれない、と回答した。それに対してさらに武井氏は、『役者評判記』の類は観劇後に回顧しながら読んで楽しんだものである、と参考意見を述べた。

鈴木淳氏は、名所図会は大本であり、携帯できるような作りの書物ではなかった。また『唐土名勝図会』など多彩な図会が刊行され、このようなスタイルの本が関西を中心にベストセラーとなっていた。そうした書物としての在り方も含めてさらに検討していくと、より面白い研究になるだろう、と助言した。